

ケサは、父に思いきつてうちあげました。父は、

「それもよからう。けれどケサ、もつとも重いがん者の友となるのでなければ医者としてのねうちはない。人にまねのできない医者になれ、わたしもできたら医者になりたかったのだよ。」

といって喜んでくれました。

それからのケサは、昼も夜も一生けん命、医学校に入るために勉強をしました。入学したときは二十一才でした。ふつうなら、けっこんしている年ごろです。

ケサは、成績もよく、校内の新聞づくりでも文章が上手で、友だちを感心させました。

ところが、二十五才のとき、セキリという伝せん病にかかってしまいました。そればかりか、心ぞう、じんぞうまで次々と悪くなってしまったのです。

「ああ、せつかくこころざしをたてたのに、このまま死んでしまうのか。」  
と苦しい息の中で何回もつぶやきました。みんなも心配しました。家族や、医学